

あるとき、カンチルが川を渡りたいと思つて、川べりを歩いていました。この広い川をどうやって渡ろうかと考えていると、遠くのほうで、ワニが水に浮かんでいるのが見えました。カンチルはかけていつてワニに声をかけました。

「おうい、ワニさん。あんたの一族はどれくらいいるんだい。ぼくの一族のほうはずっと多いと思うんだけど」

ワニは、

「えらそうなことをいうんじゃないよ。わしの仲間のほうがずっと多いに決まっているさ」といいました。

「いいや、ぼくのほうが多い」とカンチルは、いい返しました。

「いいや、わしのほうが多いに決まっている」

ワニがいうと、カンチルはいいました。

「じゃあ、あんたの仲間をぜんぶここへ集めてごらんよ。数えてみればわかることだ」

「よし、それならわしの仲間をぜんぶ呼び集めて見せてやろう。おどろくんじゃないぞ」

ワニはそういつて水にもぐつていきました。

まもなく、ワニは、ほんとうにワニの一族をぜんぶ集めてきました。カンチルは、

「じゃあ、ここから向こう岸まで一列に並んでごらんよ。何匹いるか、ぼくが数えてあげよう」といいました。そこで、ワニたちは、大きな目玉を頭から突き出し、岩のような背中を水に浮かべて、一列に並びました。

「じゃあ、背中の上を歩いて数えるよ」

「いいとも！」

「一、二、三、四、五、六、・・・」

カンチルは数えながらワニの背中をわたつていきました。そして、むこう岸に着くといいました。

「ありがとう、ワニさん。ぼくは、川を渡りたかったただけなんだよ」

ワニはくやしがつていきました。

「ようし、覚えていろよ。こんど、川へ来るときは、気をつけろ」

ワニは、なんとかしてカンチルをつかまえてやろうと考えました。そこで、川岸に寝ころがつて丸太のふりをして、カンチルが来るのを待っていました。

ある日、カンチルが川岸にやつて来ると、ワニが丸太のようにころがつていました。カンチルは、丸太に向かつていいました。

「あんたは丸太かワニさんか。もしもあんたが丸太なら、くるりと寝返りを打つだろう。もしもあんたがワニならば、きつと少しも動けまい」

すると、丸太は、くるりと寝返りを打ちました。カンチルは、すばやく飛びのいて、

「丸太はひとりじゃ動けない。あんたはやつぱりワニなんだ」といつて笑いました。

ワニは、またまた考えました。そして、川岸にあがって、こんどは、太い枯れ木のふりをして、じつとまつすぐ立っていました。

ある日、カンチルが川岸にやって来ると、ワニが太い枯れ木のように立っていました。カンチルは、枯れ木に向かって声をかけました。

「あんたは枯れ木かワニさんか。もしもあんたが枯れ木なら、きつと地べたに寝るだろう。もしもあんたがワニならば、まつすぐ立って動けまい」

すると、枯れ木はばったり地べたの上に倒れました。カンチルは、すばやく飛びのいて、枯れ木はひとりじゃ動けない。あんたはやっぱりワニさんだ」といって笑いました。

ワニは、どうしてもカンチルをつかまえないと思いました。そこで、野ブタの巣とそっくりの穴を掘って、中にかくれて待っていました。

ある日、カンチルは野豚の巣のそばを通りかかったとき、中にワニがかくれているのに気付きました。そこで、すぐに逃げ出しましたが、とちゅうでとらに会ったのでいいました。

「ねえ、とらさん。あんた、野ブタをほしくないかい」とらは、

「もちろん、野ブタは大好物だ。どこにいるんだい」とたずねました。カンチルは、「その穴だよ」といって、ワニのかくれている穴を教えてやりました。

とらは、あなに飛びこみました。びっくりしたワニはとらにつかみかかりました。ワニととらは穴の中で大さわぎして戦いました。とうとう二匹ともつかれはてて、穴から出てきました。

カンチルはもうどこにもいませんでしたとき。

原話：『インドネシアの民話』ヤン・ドウ・フリース編／斎藤正雄訳／法政大学出版社
再話：村上郁